

Newsletter

August 2008

<http://www.aack.or.jp>

目次

| | | |
|---------------------------|------|----|
| アタックの思い出 | 平井一正 | 2 |
| チヨゴリザで思い出すこと | 中島道郎 | 4 |
| 「チヨゴリザ」の時代 | 高村奉樹 | 9 |
| 高所用バーナーについての考察 | 岩坪五郎 | 13 |
| 桑原チヨゴリザ登山隊長のこと | 芳賀孝郎 | 15 |
| 飛び入りのチヨゴリザ | 今川好則 | 17 |
| 今川さんの文章を読んで・追記 | 高村奉樹 | 19 |
| チヨゴリザのおたふく狸と高所医学 | 斎藤惇生 | 20 |
| チヨゴリザ登頂五〇年 | 近藤良夫 | 21 |
| チヨゴリザ関係文献 | | 22 |
| 事務局報告 | | 22 |
| 会員動向 | | 23 |
| 訂正 | | 24 |
| チヨゴリザ登頂五〇周年記念 シンポジウム案内 | | 24 |
| 編集後記 | | 24 |



登山隊全員 後列右から岩坪、連絡将校ワジー大尉、平井、中島、今川、前列右から脇坂、山口、加藤、桑原、藤平、高村、芳賀、最前に座る潮田 (写真提供 山口 克)
(ベースキャンプにて)

チヨゴリザ初登頂五〇周年記念特集号

チヨゴリザ初登頂五〇周年を記念して、十一月に別掲(24頁)のようなシンポジウムを行います。ふるってご参加ください。

アタックの思い出

平井正一

チョゴリザ（七六五四m）初登頂に成功したとき、私は二六歳であった。後年、神戸大で登山隊を率いてシエルピカンリ（七三八〇m、四四歳）とクーラカンリ（七五五四m、五四歳）に行き、若者に初登頂のよろこびを味あわせることができた。自分自身で隊を組織し、多くの人の支援を受けて山に向かったときに、無事故で成功を勝ち取ることが、どれほど重圧になって、心身にのしかかっているかを、身を以て体験した。その立場にたつてチョゴリザをふり返ると、当時の桑原隊長に恩返しができたという喜びとともに、あのときの隊長以下の幹部連中の重圧はいかばかりであったが、当時のことが思い出され、感無量であった。初登頂から五〇年、特に秘話ではないけれども、登頂のときの思い出を書いてみる。

一、絶対登れ

AAACKが一九三一年に発足してから、多くの先輩諸氏の夢は、ヒマラヤの処女峰の初登頂であった。一九五三年のアンナプルナ遠征は、AAACK初めてのヒマラヤ遠征であったが、冬を目前にジェットストリームにテントを破られ、登頂は失敗した。そのダメージは大きく、今西錦司をはじめとするAAACKの長老は、登山よりも学術探検へと傾

き、五五年のカラコルム探検へとつながる。厳しい外貨制限や、今の金にして一億円近くかかる経費の調達など、登山派にとつて苦しい時代が続いた。（当時は一ドルが三六〇円、一ルピーが七五円であった。いまは一ルピーは三円）。しかしだんだんと機が熟し、一九五八年、切り札的存在であった桑原武夫先生が隊長として出馬を決断され、AAACKとして満を持しての登山隊が実現した。

ヒマラヤ登山に絶対登れるという保証はない。最善を尽くしても登れないかもしれないが、しかしもしここで登れなかつたら、AAACKの社会的評価は落ち、その後ヒマラヤへの隊がでるかどうか、むつかしい。絶対登れ、そういう背水の陣の遠征であった。

二、度重なるアタックの失敗

当時どういう体躯が高所に強いかは全く分かっていなかった。だからきびしい隊員選考では、体の小さい私などは甚だしく不利であった。それが幸運にも隊員に選ばれ、しかも登頂隊員にまで選ばれた。幸運の星はいつも私に味方した。因みに私が隊員に選ばれたのは、脇坂の強力な推薦のおかげと後で聞いた。脇坂とは多くの山行きを共にしていて、彼は私の粘りと力を知っていた。今は亡き脇坂に感謝している。

アタックは実は三回あった。一回目はC4（六七〇〇m）からである。ここは一年前に、雪庇から転落したオーストリアの登山家ヘルマン・プールのテントがあつたところである。プールらはここからアタックをかけている。

悪天候と隊員のあいつぐ故障に焦つた加藤副隊長は、ここからのアタックを命じた。プールも人の子、彼にできることが、我々にできないはずはない、藤平さんも賛成し、おのれプールと意気軒昂たるものがあつた。私も当然ながら賛成した。しかしこれはアイストーム（七一五〇m）の登り下りがあり、距離から言つても、冷静に考えると無理な話であつた。

一回目のアタックは、テントからいくらか行かないうちに、藤平さん不調のためにあつさり断念した。明日もう一度ここからアタックと主張した藤平さんの意見を退けて、いったんC3まで下りて、態勢を立て直そうと命じた加藤さんの卓見は、さすがだと後でつくづく思った。深追いをすると失敗するという教訓を学んだ。

二回目はテントをアイストーム直下の六九五〇mまであげ、そこからのアタックであつた。しかしドームの下りが極端に悪く（写真参考）、そこで時間をとつたため、コルから頂上稜線を登つて七〇〇mくらいから引き返した。コルから酸素を吸つた。朝三時から午後九時までの一八時間のアタックであつた。酸素装置一式と映画カメラや個人装備をいれて二〇kg強を背負い、氷化した急峻なナイフリッジをアンザイレンしてよく事故もなく下つたと、あとで考えるとぞつとした。お互いの信頼がなければスリップしていただろう。

あいつぐアタックの失敗と、残り少ない食料、燃料に、追いつめられた隊長、副隊長の心境は想像しがたい。

三、三回目のアタック

ブルルのルートは危険が多いために、ルートを変更した。後でわかったことであるが、これがアブルツチルートであった。アブルツチの報告には、危険なアイスドーム越えのことには全く触れていないので、内心疑問に思っていたが、それがアブルツチのルートと思いきんでいた。思いこみの怖さである。

登頂の日、五八年八月四日、目覚まし時計がなかったため、夜中に何度も目を覚ましたのと、ヘルマン・ブルルの悪夢に悩まされて、眠りは浅かった。あの気持ち悪かった夜のことは今でも鮮明に覚えている。藤平さんはほとんど寝られなかったという。

でもいったん登りだしたら体は快調であった。天気は快晴、第二回アタックのときの引き返し点から酸素を吸った。だんだん登っていくと雪が深く、斜面が急なために腰までもぐる。内地の山でやっているように、体で雪



腰までのラッセルが無限に続く



酸素装置一式で13キロ、個人装備をいれて20キロ



アイスドームをふりかえる

を押し、足を蹴り込み、足場を固める。そのくり返し。雪の斜面は無情にも続き、深雪が続く。私は常に先頭に立った。藤平さんを疲れさせるな、お前がひとりですラッセルせよ、というような、何か使命感のようなものを感じた。この日のために今までのすべてがあつたと思うほど、体は快調であつた。午後一時、酸素がきれた。それで特に苦しいということはないが、それ以後の速度は、極端におそくなつた。そしてやつと頂上稜線。ここまで非情にも深雪が続いた。夕方の太陽の光を浴びて午後四時半、ついに頂上に立った。A A C Kの夢が実現した瞬間である。出発以来一二時間がたつていた。月光の中をテントに帰つたのは午後一〇時半であつた。二回目と同様、一八時間のアルバイトであつた。不思議なことに、私は終始、頭痛やむかつき、倦怠感など高所の影響は一切なかつた。よほどうまく順応していたのであろう。

四、何故成功したか

私の度重なるヒマラヤ経験でも、この隊ほどチームワークのよくとれた隊はない。それがあつたからこそ、個々の力を十二分に引き出せたと思う。この他アタックのときに天気に恵まれたこと、アタックを一日早めた決断などが登頂成功の要因のひとつであるが、それ以外に、次のふたつをあらためて指摘しておこう。

①酸素の使用

何が何でも登れということで、登攀用の酸素も準備していた。高度に対する知識が乏しかったこともある。しかしチョゴリザの高度での酸素使用は、抵抗があり、できたら使いたくなかつた。登頂の話をするときも、できるだけ酸素を使ったことはふれたくなかつた。川崎重工製の酸素ボンベは二リットル、一七〇気圧で、一本三キロあり、これを三本担ぐと、付属品をいれて一三キロある。個人

装備を入れると二〇キロ近くになる。かなり重い。潮田さんから頼まれた登頂時の撮影用カメラは、ベル&ハウエル社製のもので、これも二キロはあった。

三回目のアタックのときは、二回目のときに途中でデポした地点から、一分間一・五リットルで酸素を吸った（途中まで）。今冷静に考えてみると、酸素が無かつたら、登攀はかなりきびしくなっていたと思う。明るいうちに頂上に達していたかどうかは疑問である。月明の中の登頂か、ビワークして翌日の登頂になったかも知れない。しかし次の日の午後から天気は崩れたので、最悪の結果になった可能性もある。酸素の使用は抵抗があったが、そのことを考えると、よくぞ酸素を持っていたことと思う。アンナプルナでも用いていないが、マナスルのように使用経験のある今西寿雄さんのアドバイスか、酸素使用を決断した幹部連中に敬意を表したい。

② 忍術使いの兵糧丸

忍術使いが忍びのときに何を食べていたかを研究していた平安高校の丹先生から、甲賀流白虎兵糧丸という、いかにも効きそうな携行食を提供していただいた。蜂蜜、きな粉、抹茶などを固めて作ったもので、スハマの味がして好き嫌がある。藤平さんは食べなかつたが、私は一個を食べた。私は暗示にかかりやすい性質でもあったので、これを食べると無限の力がわいてくるような気がした。あの信じられないくらいにラッセルを続けることができたのは、この兵糧丸のおかげであると、私は今もひそかに思っている。因みに

サルトロカソリの時も持参し、アタック隊の斎藤、高村は頂上手前でこれを食べたと報告している。ただそれ以後、携行食の研究も進み、この兵糧丸の名前はこれ以後消えた。

大きいプレッシャーの元で、桑原隊長、加藤副隊長、藤平登攀隊長、とくに前線で指揮をとった加藤副隊長は、その内面の焦りをおくびにも顔に出さず、常に冗談を言つて若手を鼓舞し、元気づけてくれた。後年私が隊長

チヨゴリザで思い出すこと

中島道郎

一九五七年秋、京大チヨゴリザ学術登山遠征隊の構想が発表された時、隊員として私が真っ先に選ばれたと、聞かされている。それは、「遠征隊には医師が絶対必要だが、それには中島が最適だ」という、四手井綱彦大先輩のツルの一声で決まったのだそうである。私にとっては、それは身に余る光栄であつたが、内心、えらいことになつたぞ、とビクついていた。一九五五年卒、一年間のインターンを終えて、京大結核研究所に入局してやつと二年目のペーパー研修医に過ぎない私が、果たして遠征隊全員の健康を守るという重責に耐えられるものなのか、自信は全く無かつた。当時、AACK会員の医師には、原田・伊藤・林・杉山らの諸先輩に、同級生の齋藤があつたが、どなたも都合が付かな

になつたときにそのことを思い出し、あらためてこれらの先輩のスケールの大きさに感服したものである。

チヨゴリザ成功は私の人生の岐路になつた。歴史にはは禁物であるが、もし失敗していたら、その後のAACKの歴史はどうなっていただろうか。私の人生も大きく変わっていたに違いない。本当に登れてよかつた。隊長、隊員、関係各位に深く感謝する。

かつたらしい。分不相応な重責を背負わされた私であつたが、結果的に大過なく終つた。この幸運は、あとあとまで私の生涯に好影響を与えてくれることになる。二年後、不遜にも、私はフルブライト交換研究員試験に挑戦だ。これは、年齢三五歳以上、博士号保持者なししそれと同等の実力者であることが望ましい、という条件が付いていた。私はその時まだ二九歳だつたが、年齢は制限でなく、ただ望ましい、とあるだけだから、妨げにはならない筈だ、博士号はまだ取得していないが、博士論文はもう書上げていて、提出すれば貰えるに決まっているから、同等の実力者に当るとして構わないのではないかと考えた。これは世間知らずが行なう、メクラ蛇に怖じずの類の愚行で、物笑いの種なのだが、当時、私にとってアメリカに留学するにはこの方法しかなかつたので、ダメ・モトで体当たりしたのであつた。常識知らずにも程がある、と、この愚行に呆れた指導教官の辻周介

教授はなかなか推薦状を書いて下さらなかったが、私にはこの方法しかない、と食いつがって、やっと書いて頂いて試験を受けた。試験は業績審査と口頭試験だけであったが、その口頭試験に臨んだところ、前にずらりと並んだ五人の試験官の中央に座った主査、その名も忘れぬ、Dr. Hamiltonが、開口一番「You are a famous mountain climber, are not you?」と聞いてきたのに驚いた。そしてほかの四人も珍しがって、それぞれ、ヒマラヤとはどんな所だ？其処ではどんなものを食べているんだ？といった類の質問が相次ぎ、これが試問？といった和やかな空気であった。すぐに時間がきて、主査が「あ、そうだ、これだけは聞いておきます。あなたはこれまでどんな研究を行なってきたか、それをアメリカでどう発展させ、帰国後それをどう役立たせるつもりですか？」と聞いてきたが、これはお決まりの質問であり、あらかじめ草稿を作って十分暗記してきていたので、立て板に水、一分で終わった。後日合格の電話を貰って目出度し目出度しになったわけであるが、競争率四倍、この時京大医学部から合格したのは私のほかに、助教授二人、助手二人であって、後に、そのうちの三人は京大教授、一人は東北大教授になられたから、その時単なる無給副手で、後に教授にも何にもならせて貰えなかったのは私一人。だから、私の合格は本来ありえぬ異例であり、それがありえたのは、Dr. Hamiltonの私への買い被りで、それというのも、全くチョゴリザ遠征のお蔭なのであった。

幸いなことに、この遠征の全期間を通じて、隊員の誰かの病気になるいは怪我にてこずった、という記憶はない。例外は脇坂隊員で、彼は何度か、体の不調、ある時は歯痛、また別の時は腹痛、と、いろいろとよく訴えた。歯痛は、これは多分虫歯だろうと判断し、アスピリンを余分に持たせておいたが、それだけで済んだ。他方、腹痛のほうは手ごわく、ある時、痛みが思うように収まってくれないので、思わず「胸のことは少し判ってきているけど、腹のことはよう判らんなあ。」と呟いたところ、「ワーツ、オレはこの藪医者に殺される。」と真顔で怒鳴られたことがあった。おそらく軽い胃潰瘍だったのだろうと想像するが、こうして怒鳴られながらも、それ以上、例えば胃潰瘍の穿孔といったような、大事に至らずに済み、なんとか随行医師としての責を全うすることが出来たのは、私のみならず全隊員にとつて幸せなことであった。

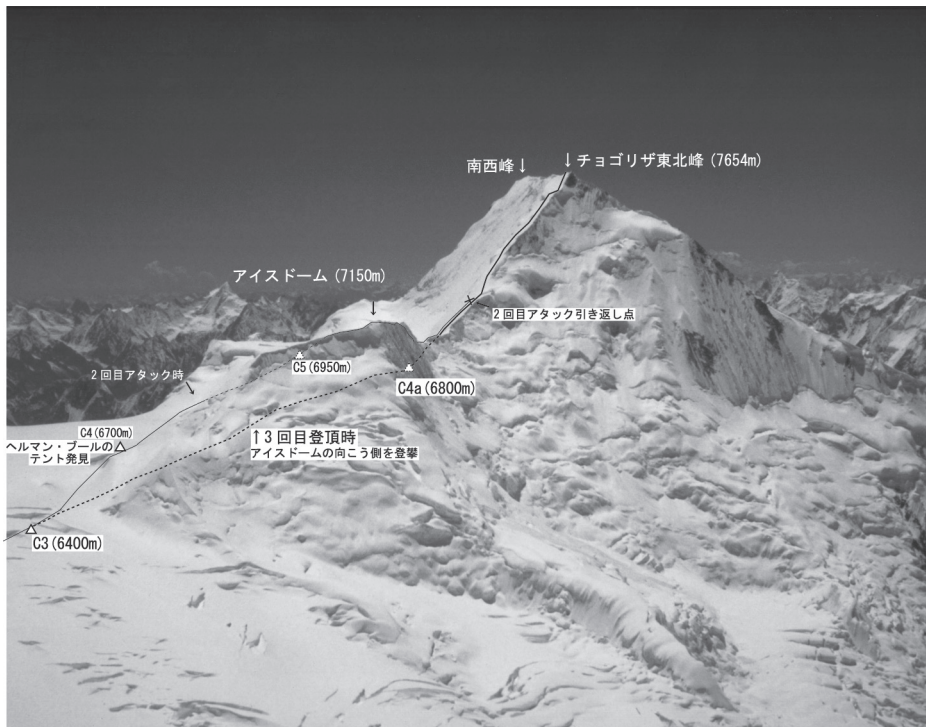
高所に登ると、全身が浮腫状態に陥る、なんてことは全く知らず、そんなことは想像もしていなかった。迂闊なことに、医学に素人の桑原隊長ですら、顔が狸みたいにポンポンに腫れてBCに下りてきた若手の二人が、翌朝元のスッキリした顔に戻り、大量の排尿をした、という現象を観察されていて、「それは何でや？」と質問されたのだが、私はその現象に全く気付いていなくて答えられず、恥づかしかった。

浮腫について思い出すのは、チョゴリザの後の祝賀会で、だったと記憶するが、後援会長であった平沢興総長が私に、「これは非常

に面白いテーマだよ。人体に、浮腫という症状がいかなる機序で生じるのか、そしてそれが高所低酸素環境とどう結びついているのか、勉強して見給え。」と仰って下さった。このお言葉は、以後、今に続く私の生涯の指針となったし、この時から二十三年後の一九八一年に、私が世界に先駆けて登山医学を標榜した Society「日本登山医学研究会」(現日本登山医学会)を創設する出発点ともなった。

のちに知ったことだが、高所低酸素環境において人体に表れる諸症状(要するに、広義の高山病)の本質は、水分の体内異状貯留(これ即ち浮腫)である。生きた生物体の体内では、一個一個の細胞の必要に応じてそれぞれに水が入ったり出たりする。その出入を管理するのは細胞膜、そして細胞膜がその『仕事』を行なうには、そこにエネルギーが要るわけだが、そのエネルギーの発生には酸素が要るため、酸素の少ない環境にあつてはそのエネルギーが不足する、即ち細胞レベルにおける水の出入りが滞る。それが浮腫である。この現象は、身体内すべての細胞に等しく生じるわけであるが、そのことに敏感な臓器と鈍感な臓器の違いがある。特に敏感なのが脳と肺である。脳の浮腫は、始まると先ず頭痛がして、食欲不振・むかつき・嘔吐・不眠・倦怠……と症状は進行し(但し順不同)、ついに機能停止即ち死に至る。肺の浮腫は、そのことによつて、肺の唯一の仕事である酸素の取り込みが阻害されるため、体内の酸素不足は雪だるま式に進行し、容易に死に繋がって

芝浦工業大学カラコルム登山隊七六年から提供を受けた。バルトロカ
ンリ皿峰から撮影



C3でくつろぐ、右から加藤（ヘルマン・プールの白い帽子をかぶる）、平井、藤平、潮田、背景はコンダス・ピーク（6758m）



C4にてヘルマン・プールのテントを開ける加藤（写真提供 山口 克）



カベリ・ピーク（6950m）に立つ山口、背景はチョゴリザ（写真提供 山口 克）

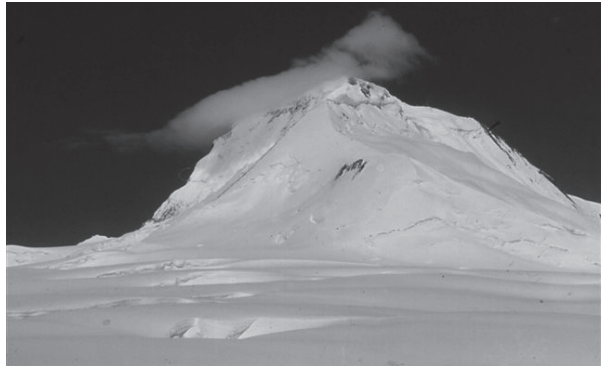


カベリ・ピークに向かう（写真提供 山口 克）

C2からK2、ブロード・ピーク、ガッシャーブルム
4峰を望む



コンダス・ピークに立つ今川、背景はシェルピ・カンリと
サルトロ・カンリ（重なっている）



コンダス・ピークから見たチョゴリザ

しまう。だから、前者を高所脳浮腫、後者を高所肺水腫（浮腫も水腫も同じことだが、習慣的にこう呼ぶ）と呼んで、重症高山病として恐れられているが、この、重症に至る前段階の軽症形を急性高山病と呼んでいる。呼び名は違っても、その本質は浮腫であることに違いはなく、脳浮腫の初期段階なのである。以上の要点を繰り返すと、高山病とは、身体が低酸素環境に曝されて全身浮腫状態に陥ったものであって、特に脳と肺の浮腫による症状が目立ち、その重症形を高所脳浮腫・高所肺水腫と呼ぶが、その軽症形は、高所に足を踏み入れた者の殆どがこの状態になるわけで、これを急性高山病と呼ぶ。高所脳浮腫・高所肺水腫・急性高山病三者はその本質に違いはなく、従って、対策も一つで、少しでも酸素の多いところ、すなわち低所にその体を移すべきである。酸素吸入・デキサメサゾンなどの薬物使用は、あくまで間に合わせに過ぎず、根本解決には至らない。しかし、これらの知見は、私が体験した一九五八年より後になって徐々に判ってきたことで、その当時、世界中誰も知らなかったことであり、体験する事象の一つ一つが新発見、そういう時代であった。

なお、この『狸顔』であるが、顔面が浮腫であるということは、脳にも浮腫が来ていた筈である。しかし彼らは頭痛を訴えず、ほかに行動に差し支えるような症状もなかった。これは、バルトロ氷河をゆつくり登ってくる間に徐々に高所に順応出来ていたため、少々の浮腫状態であっても、それを異状と感じな

くなっていた、ということなのである。私自身も、後にエベレストの時はナムチェで、シヤパンマの時はラサで頭痛・倦怠を覚えたが、このチョゴリザの時は一度もそれを感じなかった。高所に上るに際し、一日の高度差が三〇〇m以下ならば、順応しながら登って行けるのであるが、バルト口氷河はまさにそういう条件の場所である。ならば、一日三〇〇mづつ登ってゆけば、高山病に罹らずに何処までも登れるか、というところ、そうはゆかない。人体が低圧環境に順応してゆけるのは二分の一気圧環境、即ち海拔約五五〇〇m高度までである。それ以上の高所環境には、人体は絶対に順応しきれず、滞在日数が増えるほど衰退が進行してゆく。従って、ヒマラヤ登山の要諦は、五五〇〇mまで高所順応したら、後は一気に登頂し、直ちに下山するべきである。

またもう一つここで述べておきたいことは、急性高山病と二日酔いと共通性である。二日酔いとは、前夜飲み過ぎての翌朝に感じる頭痛・むかつき・倦怠などの症状で、これは高所宿泊第一夜の翌朝感じる急性高山病症状に類似する。実は、症状が類似しているどころか、両者全く同じもの、すなわち共に軽い脳浮腫なのである。前者は、アルコールの分解中間産物アセトアルデヒドが、脳細胞の酸素取り込みを阻害することによって齎される脳浮腫、後者は環境性低酸素による脳浮腫、要するに、低酸素による脳内水分異状貯留であり、従って、対策は両者同じ「酸素吸入」である。朝起きて、昨夜飲み過ぎた、頭が痛い、

と感じたら、薬局で携帯酸素ボンベを一本買って、シューと鼻に吹きかけたら、全天を覆っていた黒雲が忽ち雲散霧消して、青天白日になること請け合いです。また、山の上では酒を飲んではいけない、という理由もこれでお判りであろう。環境性低酸素とアセトアルデヒド由来性低酸素の脳浮腫二重奏の故に高山病症状が早く且つ重く現れるからである。余談ながら、私はシヤパンマに登頂して帰ってきて以来この一七年間、一度も二日酔いになったことがない。それまではしょっちゅうそれで悩まされていたのに、である。それもこの現象と関係があると思われる。

キャラバン途次における村々の住民に対する診療は、私にとって大きな負担であった。やって来る患者さんたちは、腰痛・関節痛・頭痛・腹痛・咳・眼脂といった単純な訴えばかりであったが、おぎなりな診察と、簡単な対症療法剤を与えることしか出来ず、それも手持ちの薬剤には量的制約があり、一〜二回分の投薬で済まさねばならないので、これではどうしようもない、という無力感に苛まれた。また、間違った投薬で、却って苦痛を増大させたケースがあり、自分の未熟さを強く反省すると共に、医者として、してはならないことをしてしまった、という後悔にかなり苦しんだ。その時、強く自分の心の中に叩き込んだことは、「医療行為に間違いがあってはならない」という戒めで、これは今も強く私の心の中に生きている、

ラワールペンディ滞在中は誰もが下痢に悩まされた。それがスカルドゥ以奥のキャラバ

ンでは誰も悩まなくなり、山中ではむしろ便秘であった。それは多分脱水と植物繊維性食品の不足によるものと思われた。その証拠に、下山してアスコレ部落に戻ると、杏がたわわに実り、その下を歩きながら、手を伸ばして黙って採って食べても、ポーターも村人も誰も文句を言わないので、皆かなり食べたわけだが、そうすると、全員便秘が治ったのである。

スカルドゥの中心から北西、インダス河岸の崖の上に土塀に囲まれた建造物があつた。軍事的な施設らしかったが、好奇心に駆られて、河岸から崖を登攀して行ってみたところ、その土塀の中から出てきた若い兵士に誰何された。チョゴリザ遠征隊員の一人だと英語で名乗ったところ、「エクス ミナト（一分。ちよつと待て、の意）」と言ひ残して中に入つて行つた。さあ、スパイ容疑で逮捕されたりしたら国際問題になりかねず、登山どころでなくなるかも？ そうなったらどうしよう、と、自分の軽率な行為を反省していたところ、さっきの兵士の後ろに数人の将校らしい軍人たちがついてきて、「How do you do」と握手を求めてきた。やれやれ、スパイ容疑は免れたらしい。彼らは私をテラスに請じ入れ、茶を振舞ってくれ、いろいろと話掛けてきた。私はドクターだが、この辺はマリアはどうなんだと尋ねたところ、この辺では、ハマダラ蚊は海拔八〇〇m以上には生息せず、従ってマリアの心配はない、と教えてくれた。一つ知識がふえた。あれから五〇年。地球温暖化の現在でも、あの辺はマリア

アの心配はない、と信じていて大丈夫だろうか。

以上、チョゴリザの思い出を、随行した医師としての立場から、全くメモなしのうる覚えで綴ってみた。かなり我田引水的に高所医学談義に流れた嫌いはあるが、読んでくださった方々には多分参考になっただろうと自負している。文中にも何度か触れているが、

「チョゴリザ」の時代

高村奉樹

いまから半世紀まえのこと、AACKでは最も若手の私は、当時の西パキスタン政府への登山申請書を脇坂さんが書き換えるたびに、事務局の近藤良夫先生がチェックするのを待つて荒神口近くのタイブ印刷屋に幾度往復したことだろう。先方政府の注文に応じて再申請するのだがチョゴリザを含む登山許可はいつまでたつても来そうにない。待ちきれない酒井オシメさん、大学院一回生の田附や私たちは、下鴨の今西錦司先生のお宅にたびたび押しかけてライトエクスペディションを実現したいと教えを乞うた。「日本からオート三輪を船積みして、バブサル峠越えて、ヒンズークシユをやつたらどうや！」しかしそのうち「西北ネパールで企画している学術探検チームも難航しているようだ、登山班として合流し協力してはどうか」ということにな

チョゴリザのお蔭でその後の私のあり方が決つたと言つて過言でない。私と同時代にヒマラヤに登つていて、未だに現役の登山医学者をやっている者は、世界中で私のほかにイギリスの Midge 博士とアメリカの West 博士くらいしかいなくなつたが、こういう連中と今でも対等に話が出来るのも、本当に有難く、チョゴリザに感謝、の毎日である。

り川喜田先生とも相談をはじめた。ところがその直後、一九五八年が明けて一月一日チョゴリザの登山許可証がとどいた。ただちに AACK の先輩たちが相談を重ねた末、今西先生が桑原武夫先生に隊長を頼むと懇願したのは、かれが伊谷純一郎さんと初めてのフリカ調査に出発する直前である。その二日あと「ベレー帽をかぶり、双眼鏡を斜めにかけてさつそうと若返つた」今西先生たちを私たちは京都駅で見送り「汽車が出たあと、仲間の幹部級一〇人ばかりで駅の二階の食堂でテーブルをかこみ、直ちにチョゴリザ遠征の基本方針をきめた。」(22頁文献③)。若い私たちもここで「幹部」の末席に加わつたよう
で、以後この計画に集中することになり、川喜田隊は学術隊として独自に準備を進めることになつた(註1)。時を経ず行われた隊員選考で選ばれた私に課せられた役割は、装備係、そして同時に隊長づきの「秘書」！および記録係であつた。今回はチョゴリザのエピソードなどを書くようにという編集長の呼び

かけがあり、五〇年前の最若年隊員のひとりとして昔語りを書かせていただくのでお付き合いください。

五〇年前の装備係のメモ片

山岳部現役時代も装備係りは担当したが、創意工夫で新しい装備をつくるなどという経験は乏しく、どちらかといえば古い装備を先輩たちから借り集める役目が多かつた。しかし今回はいきなり高所用の個人装備やテントの製作である。当面の課題はいくつもあり酸素吸入装置関係は松浦祥次郎兄、織維関係については田附重夫兄、装備とくにテント製作は荻野和彦兄に協力をお願いした。さいわい武庫川女子大の家政科に着任して日も浅い安田 武さんが、顧問役として新たな織維素材の活用による高所装備の製作に猛烈な熱意を燃やす。一方では京都の準備本部の指揮官土倉九三さんも新たな装備の開発に強い興味をもちつつ、全体としてバランスの取れた遠征準備をしようと私たちを指導するベテランである。海外遠征新兵の私はその中でいろいろともまれながらも楽しい日々を送つた。メモと題したが、手元には小さなパッキングリスト、報告書(22頁文献②)にある座談会とその巻末のリスト装備一覧表以外何もない。
まず織維関係ではすでに普及していたナイロンだけでなく、あらたにテリレンを素材とした織維テトロンを用途に応じていかに織り込んで活用するかがテーマであつた。多くの在阪企業の方法提供と織布技術の試験協力によつて、いくつもの新製品につながる布地が

完成した。ウインドヤッケ、オーバーズボンには棉・ナイロン交織のほかオールテトロンが、低地用のテント、グラウンドシートにはビニロンがえらばれたが、いずれも当時はたいそう高価なものであった。棉・ナイロン交織のウインコルと呼ぶ繊維は高所テントにも使ったが、英国カンチエンジュンガ隊の報告を見て、安田さんが提案したと記憶する。いずれの布地も試作後には磨擦や引っ張りに対する強度だけでなくインストロンを使ってウエザリング、つまり紫外線や湿・温度変化による劣化試験にも供した。各社の担当者、専門家の安田さんだけでなく、素人の私にも協力と助言を惜しまれなかったが、今にして思えばこれを契機に新しい繊維商品の開発が可能ならばという思いもあったのである。か。テントの色調にかなり配慮したのだが、素材との組み合わせによって、居住性がずいぶん違ふといった初歩的なことに気付いた。氷河の上だから緑がいいかと作ってみたが、棉交織では内部が暗く、また緑色はガスがかかると思つてにくい。布地は立派なものができたが、これをテントに縫製加工するとき、いつも無理をきいてもらう一澤帆布の親父さんから呼び出しがかかった。「このテトロン布地は硬すぎて、ミシンの速度を上げると針が過熱、縫糸が融ける。納期に合わせるのには難しい。」いまさら布地を薄く弱くすることはできない、親父さんには悪いがゆつくりあわててミシン掛けてくださいと頼み、切り抜けてもらった。

羽毛服も試作したが、薄いナイロン地を通

して羽毛が突き出るなどの難点を克服するのにはずいぶん苦労してもらった。テントのポールや背負子にジュラルミンパイプを使ったが、これは大阪の好日山荘大賀さんの肝いりで町工場で作してもらい間に合った。そのほかプロパンガス用の小プラスチックボンベ（一〇〇cc容・手榴弾型）を土倉さんの車で鈴鹿越えして浜松に成型試作を頼みに行つたが、携行したのはサルトロ・カンリの時である。帰国後開かれた報告と検討の座談会（22頁文献②）では、装備について一般に力をいれるところのバランスが十分取れていなかった、とずいぶん厳しい批判をいただいたがこれは甘んじて受けるほかなかった。強力な専門家を総合する知恵が必要とされたが若者には難しかった。こうしたことを含めて

チョゴリザの装備がその後いかに改善されたかは、この四年後一九六二年に実施成功したサルトロ・カンリの報告書巻末リストに詳しい（註2）。なにしろ船積みまでの三ヶ月はほとんど農学部の研究室には顔を出さずに装備屋になってしまった。ときには学習院から参加の芳賀兄が京都まで助っ人に来てくれた。準備に許された時間は短かったが、いくつかはじめての試みもできたし、また既製の電機製品や炊飯具など多くの寄贈を受けることができたのは仲間やAACKの先輩たち、そして当時の関連企業の暖かい支援のおかげである。このとき仕上がった高所服や新作の装備の一部は、ネパールに行く川喜田隊にも行き届くよう準備協力して、途中で計画から降りたことの負い目を少しは返せたかと安堵

した。

なおテトロン製の平織りは衣服材料としては硬く、チョゴリザでは不評であったが一九六二年堀江謙一氏による太平洋単独ヨット初横断のマーメイド号の帆布として威力を発揮し、また国鉄の作業着の繊維としても採用されたと記憶する。

ヒマラヤ初見参の若者、今だからのメモ片

初めての大氷河の山旅で若者たちが結構のびのびと、時には加藤・藤平さんにルートや休み場の取り方などで大目玉をいただくことはあっても、楽しく過ごすことができたのは、桑原先生、加藤さんの人柄と優れた運用の妙によるもの、また日本の冬・春山をともした身近な先輩脇坂さん、山口さんのおかげだ。地元との折衝、キャラバンの進行にはいろいろトラブルはあったけれども、クリアできたのは当時カラチ大使館勤務の書記官補今川好則さんの堪能なウルドゥ語のおかげである。私はこうして「エクスペディション・シユール」の洗礼を受けたわけだが、半世紀後のいま当時のことを振り返ってBC以上のことでもメモとして残しておきたいことが二、三ある。今いろいろいと記録を読み返すうちに、まづまことに申し訳ないことに気付いた。それは八月四日、登頂に成功したアタック隊の迎え収容時のことだ。わたしはこの日、高度六六〇〇mのキャンプ4bの正面を開け放ったテントから、その日早朝に六七〇〇mのアタックキャンプ（C4a）を出発した藤平さんと平井ボコさんが時折ガスに消えながら未

踏の高みへと登って行くのをわくわくしながら眺めていた。だがかれらを収容するためわれわれサポーター隊が雪原を上部に向かったのは、登頂成功は間違いないと確信できたころだった。約一時間半でアタックキャンプに着くがそこに山口さんを残し、中島、高村が高度六九〇〇mのゴルまでテルモスの茶を携えてでかけたのはすでに夕闇の中。

「下の第四キャンプから、ライトをつけた二人がゴルへ向かうのが見える。前後左右、何も見えない真暗やみである。何か無限の空虚へ向かつて下りて行くような気がする。……無限に長い時間がたったような気がする。……もうゴルが近いらしい。それにしてもサポーター隊は何をしているんだ。(註2 藤平記) 私たちがもう二時間早く迎えに出かけておれば、ライトをつけることなく迎え入れることができたはず。山口、中島両OBもいた上での判断ではあったがもう少し何とかならなかったか。しかしその後、藤平さんの口からこのときの辛さを聞いたことはない。それよりも迎えに出た山口さんが両腕でしがみついて喜んでくれるのはいいが、何時までたっても離してくれなくて困ったよ!という

ことをしよつちゅう聞かされた。一方山口さんは「離さなかったのは藤平さんだ!」改めて登攀派と三高旅行部派に通じる強い喜びと感動があったのだろう。その夜サポーター隊三名が登頂隊を収容後、自分たちのテントへ向かったのは皓々と照る月下の二二時。そして翌日美しいドーム状のカベリピーク(六九五〇m)にアイゼンを利かせて気分良

く初登頂したが、この余裕は前日にさぼったおかげだとは言われたくないものだ。頂上では山口さんが「マーちゃん頑張れ!」と家族から送られた日章旗を広げた。

次は氷河ルートのとり方のことである。ベースキャンプ設営後、アイスフォール突破のために巨大なセラック群をいくつかのチームで偵察、五〇〇m登ったところにC1ができたが、次のC2へのルート偵察は岩坪とわたしが担当した。「そのルートが左へ、バルトロ・カンリよりにつきり流されておる。……もつと右よりに行けるルートがたっさんあったと思うのです。……これはたいへんはつきりいってお気の毒だけれども、まだいまの若い人たちが、ふつうの日本の山でのルート・ファインディングというものの修練をつんでない証拠ではないか。」(笑声)。(22頁文献②)。まさに言われるとおりだ。少し無理をすれば確かにC3へ直登のルートもあつただろう。しかし岩坪は三〇分おきの無電交信でうるさく状況を聞いてくるのでゆっくり偵察することができなかつたと述懐する。私たちの未熟は認めるとしても荷揚げポーターの技術のことを考えると、余り厳しいところやフィックスが要るところは避けたいという気持ちで働いたと記憶する。(その後一九六一年、私は単独でサルトロの南面を偵察のときに、彼らハイポーターのひとりグラム・ラッスール(通称地藏さん)とふたりでドンドン氷河を五五〇〇mのゴルまで登ったが、技術はともかく誠実、サブ思いで心がよく通じる人であつたことを付記してお

きたい)。

桑原先生の手記では「C1からC3までは、三角形の二辺を進むことになったのは、攻撃路として大へん不利であつた。加藤は「チョゴリザをやつたら、あとでバルトロ・カンリに登るのに便利でよろしい」などといっているが、……そのことには焦燥を感じさせるものがあつた。」(22頁文献③)。しかし現場でのタイアンさんはそうしたそぶりはすこしも私たちに見せられなかつた。

さて最後のひとつはアブルツチ公よりはヘルマン・プールのルートにこだわりすぎたか?ということである。チョゴリザにはじめて足を踏み入れたのはイタリヤの王家の血を引くアブルツチ公だ。アルプス山城のほか既にアラスカセント・エライアスやアフリカルウエンゾリ最高峰の初登後、同公がカラコラムに遠征したのは一九〇九年、この年にK2の試登とともにチョゴリザ正面氷河を越えて頂上に迫つたのである。その報告書の関連ページはマイクロコピーにして幾人かは携行していたのだが、半世紀前にこのパイオニアが選んだルートについてはそれほど気にしなかつた。また布引尾根の左側のア公のルートのゆるやかな雪原が見えたが先はどうなっているのか分からない。なんとなく迂回路といった認識しか持たず、そのうえキャンプ設営のため六七〇〇mまで上つた脇坂、芳賀、高村がドームの肩で一年の風雨にさらされ半ば雪におおわれたプールの最後のテントを見出していたことから、ヘルマン・プールのとつた尾根筋を辿ること以外に頭はまわらな

かった。余談だが、すぐその横に立てたC4で高村はストープの着火が旨くゆかず、ケロシンの生ガスをかいで一時意識をなくして平井ポコさんが「憂慮すべき状態」と無電連絡して加藤さんたちを驚かせたのだが、あのころ誰かはブルのたたりか？と冗談をいった気がする。ただし私は意識をなくしはしたが、その間怪しげな物影などは何も見ていない。尾根伝いにコルに向かうこのルートはトラバースで山口さん、岩坪らを滑落の危険に遭遇させ、そのさきのコルへの下降路の悪さはブル同様に藤平さんをして足のすくむ思いをさせている。幸い第一回のアタックの帰途には藤平さんたちはカベリ側に広がる緩やかに傾斜した雪原をC3に戻り、最終アタックにはこれを辿った。まさにアブルツチ公のルートである。

歴史に「たら」はないが、あえて言えば最初からこのルートを取っていたら……日数にも余裕ができたことであろう。ただしこれらのことは「今は風に語らしめよ」う。(22頁文献⑥)。

このほかの私の役割は隊長の秘書と記録係であった。秘書役は出発まで毎日自宅に朝早くから詰めて雑用をやれと土倉さんにいわれたが、桑原先生に話したところ、「そんなことはいりません」。おかげでラホールへは隊長付で空路飛び、時間まちの間にモスクや砦などをタンガ(二輪馬車)に乗って見物する役得に与ったが、パンジャブ大ベグ教授と会合のアレンジを電話で辛うじて取り次いだ以外、桑原隊長は何でも一人でこなされた。ま

た記録係は写真係でもあったが、これらはやばやと失格の烙印を押されたが以後も写真の腕はあがらない。ただ帰国後スカルドでの公式パーティの写真がないのはどうしたのかと芳賀、高村は責任を問われたが、実は二人ともまだ現地に到着していなかったということでおゆるしいた(22頁文献②)。

桑原先生は「チョゴリザ登頂」を「つらいことは何でもやっておいた方がいいのだ。」と結ばれたが、つらいことのいくばくかはその利かぬ秘書役のせいだったと半世紀たったいま、まことに遅まきながらお詫びしたい。

おわりに 五〇年前の時代のいぶき

今年(2017年)はチョゴリザ初登頂とともに、初めての南極越冬としてアフリカ霊長類研究のいづれもが五〇周年を迎える。アフリカに今西先生たちが出かけるのを見送ったことは先に記したが、同時代のもうひとりの先達、西堀栄三郎先生のことをひとつ書きとどめたい。

宗谷丸が出発する前のある日、京都大学楽友会館では南極越冬隊壮行の会が開かれ、先輩の北村泰一さんを見送るためにも私は出席した。そのとき西堀越冬隊長が南極の説明と計画の概要説明をおわったところで聴衆から質問がでた。「万一引揚げ救出作業が滞るような場合、貴殿は何年持ちこたえる準備をしておられるや？」これに対して西堀先生はあの独特の微笑みをうかべながら悠然と答えられた。

「ウイスキーなどアルコールは二年分ありますから、二年間は大丈夫です！」緻密な計

画と自信のうえでのことであろうが、その豪放なことばには凄いと感動した。

桑原先生のチョゴリザ行きのお膳立てをしたのも今西・西堀両先生の力があつたのだが、当時の時代の流れ、未知への憧れ、学術研究展開の意欲、そして社会的には新製品開発の要請、これらのすべてが新たな知的・探検的挑戦の原動力になった時代であった。

なお現在、京都大学では「カラコラム」「チョゴリザ」の映像をDVD化して、その解説とさらにその後の関連分野での活動、研究展開を載せた冊子とともに京都大学学術出版会から刊行する企画が進められている。氷河上の危険をもとめせず頑張られた、カメラ廻しの鬼、潮田三代治さん撮影の「花嫁の峰、チョゴリザ」が今世紀の若者にも見てもらえるならば、出演者のひとりとしては少々照れくさいが嬉しいことだ。

半世紀まえに二三歳の私を叱咤しつつも後輩として暖かくみまもり指導してくださったが、すでに先発された桑原先生、加藤タイアン、藤平正夫そして脇坂 誠の諸先輩に改めて感謝の気持ちを捧げ、山口さん、中島さん、登頂者平井ポコさんはじめ残留組の諸氏の健勝を祈りつつ、長きに過ぎた思い出の記を終わる。

註1 川喜田二郎 鳥葬の国 ―秘境ヒマラ

ヤ探検記― 光文社 一九六〇

註2 サルトロ・カンリ 京都大学学士山岳

会 朝日新聞社 一九六四

高所用バーナーについての考察

岩坪五郎

はじめに

天気さえよければ、毎日のようにエヴェレストが登頂される現在、わたし自身は坐骨神経痛で、一五分ごとに休憩しなければ歩きつづけることが困難などといった状態で、過去の登山装備についての考察は、まったく無意味であるといえる。

しかし、先日の四川省の大地震で、自分の小便をペットボトルにためて、飲用し、救助された男性のニュースがでた。小便をのむ話など、タクラマカン砂漠でのスヴェン・ヘディンの話いらいきいたことがない。また、一九七三年ヤルンカンの報告会るとき、アタック隊のヘッドランプのゴムの部分が寒さのために硬化してしまい、うまく機能しなかったとの話をきいて、そんなことは、一九五三年アンナプルナ隊の経験で、わかっているはずではないか、と山口克が悲憤慷慨した。

つまり、われわれは、いろいろの知識、経験を蓄積しておかねばならないのだと、痛感している次第である。

一九五八年チヨゴリザ

C3 (六四〇〇m) からその傾向はあったけれど、C4 (六七〇〇m) で、ケロシンバーナーSVEAの調子が悪くなり、生ガスを吸って、高村泰雄は体調をくずし、一時、BCに

おりるといふ事故がおこった。序燃皿でのメタが燃えつきると、炎が消えて生ガスが出るのである。

一九六〇年ノシャック

C3 (五五〇〇m) から上では、PRIMUSのプロパンガスバーナーとボンベ計二・四kgを使用した予定であった。このときまたま鉢合わせしたポーランド隊が、われわれにとつてはじめてのCamping Gaz一缶とTOHMMENの気圧高度計を貸してくれた。欧米先進国では、このようなものがあるのかと驚いた。当時、わが国では、自動車といえば、ルノー、ヒルマン・ミンクスなどが主流であった。

一九六二年サルトロカシリ

ハントのエヴェレスト隊、エヴァンスのカーンチェンジュンガ隊が使用した、ノズル調整器つきのケロシン用PRIMUSを香港で購入し、高所ではPRIMUSのプロパンバーナーを使用した。ぐあいの悪かった記憶はない。

一九七三年ヤルンカン

PHOEBUSケロシンバーナーとPRIMUSプロパンバーナーが主体。高所で、PRIMUSプロパンバーナーの炎が小さく、アタック隊出発の準備に手間取った、と甲斐邦男はいつている。

一九七四年K12

高所で、ボタンバーナーの使用を考え、阪

本公一の好意でスエーデンから数十缶が伊丹空港に届いたが、登山隊貨物としての空輸が禁止され、廃棄せざるをえなくなった。アタック隊用に四エチル鉛の入っていない白ガソリンを使う軽量バーナーを持参したが、パキスタンでは白ガソリンを購入することができず、アタック隊はメタのみを持参し、二晩のビークでぬるま湯しか飲めなかった。もし、彼らが熱い食事をできていたなら……、と心が痛む。

わが国でガソリンが無鉛化されたのは、一九七五年以降である。米国で自動車ガソリンが無鉛化したのは、一九九五年。レシプロエンジンの航空機用ガソリンは、いまでも鉛が使用されていると、インターネットの記事にあった。空軍の燃料など使用することになれば、今も注意が必要である。

現状

アウトドアショップ「岩と雪」経営の登山ガイド山本一夫によると、現在、エヴェレスト、サウスコルの常設テントでは、PRIMUSのプロパンバーナーが使用され、アタック用のバーナーとしては、遠征隊・寒冷地用としてプロパンを混入したボタンガスバーナーが使用されている。それでも低温のもとでは、液化ガスが気化しにくいので、燃焼熱の一部をカートリッジに伝える急速気化促進装置を付けている、という。近藤裕史は、一九八二年カンペンチンの報告で、アルミ製天ぷら用ガード使用により、ボタンバーナーは七千メートル以上でも驚くような火力を発揮す

各登山隊の使ったバーナーと燃料など

| 年 | 遠征隊 | 機種 | 単体重 | | コメント | |
|------|------|---------------|---|----------------------------------|--|--|
| 1953 | 英国隊 | Everest | primus 小 primus 大 | 1.58 k 2.0 k | 4 18 | South Col で快調 |
| 1953 | JAC | マナスル | svea primus | | | 交換ノズル使用 交換ノズル使用 |
| 1953 | AACK | Annapuruna IV | svea primus アルコールバーナー ケロシン アルコール | | 4 2 12 30 ガロン 15 ガロン | |
| 1955 | 英国隊 | Kanchenjunga | primus No.54 | | 4 | |
| 1958 | AACK | Chogolisa | Primus double-burner ranges No.523/2 svea 中型 primus バーナー 800 g primus # 2005 小型ポンベ 1.3kg プロパンポンベ 10kg 入り 26 k ケロシン | | 2 8 5 5 8 54 ガロン | |
| 1960 | AACK | Noshaq | svea 中型 プロパンバーナー 500 g プロパンポンベ 1.9 k プロパンポンベ 10kg 入り 17 k ケロシン | | 2 2 2 2 36liter | |
| 1962 | AACK | Saltorokangri | primus ケロシン用 primus プロパンポンベ 1kg 入り primus プロパンバーナー プロパンポンベ 10kg 入り Camping gaz バーナー ブタンポンベ プロパンナイロンポンベ 100cc 特製バーナー ケロシン 4リッター缶 | 1.45 k 1.5 k 0.8 k 26 k | 10 5 5 13 3 50 250 10 96 | 香港で購入、ノズル調整機付き 岩谷産業 岩谷産業 岩谷産業 |
| 1973 | AACK | Yalungkang | Phoebus ケロシン用 プロパンバーナー ケロシン プロパンポンベ 10kg 入り プロパンポンベ 10kg 入り ブタンバーナー ブタンランプ | 5 k 1.2 k | 10 11 600 リッター 30 8 6 14 | KHL-1008 型 ドラム缶 アルミ合金製 鉄製 高所キャンピングで出力低下。 好評 |
| 1982 | AACK | カンペンチン | EPI PS 型ブタンガスコンロ EPI 寒冷地用ブタンガスポンベ ブタンランプ | 0.2 0.3 | 9 210 | ポンベ1ヶで3時間 アルミ製天ぶらガード使用により7千 米以上でも驚く火力を発揮した バーナーの残りガスが使える。 |
| 1985 | | ナムナニ | ホエーブス 625 EPI ガスコンロ EPI 寒冷地用ブタンガスポンベ アルミ製天ぶらガード | | 6 14 624 30 | BC、ABC 用ケロシン用は 625P |

る、と述べている。

考察一 ケロシン用バーナーについて

甲斐邦男と横山宏太郎は、高所がバーナーに及ぼす影響として、酸素分圧と気圧と気温の低下を挙げています。気温の低下は、夏のカラコラムやプレモンソーンのネパールでは、内地の冬季と比べてそれほど低くはないだろう。酸素分圧の低下により燃焼しにくくなるのは、間違いないことであるが、ハント隊もエヴァンス隊も、八千m以上でケロシンバーナーを使っている。

気圧の低下の影響が大きいようである。ノズルから噴き出したガスは、低圧の空間では、平地より高速で噴出、移動する。ベルヌーイの定理である。そのため燃焼はバーナーから離れた場所でおこり、バーナーが温まらず、気化が悪くなる、としている。

チョゴリザのSVEAで、わたしはそれを目撃している。下皿でメタが消えると、燃焼炎がノズルから離れ、だんだん先端部だけに なって、やがて消えてしまい、生ガスとなり、液体が噴出した。同じ現象をガスライターでも、経験した。これはライターの底にある調節ネジを締めることによって、解消した。

したがって、PRIMUSとPHOEBUSのように、噴出ガスを調節する、つまりノズルの噴出孔を調整できるものがよくて、それのないSVEAのほかに、噴出直径の細いノズルに交換する必要がある。しかし、あの交換は結構面倒である。先端にノズルを挟む部分のついた、途中で蝶つがいのついた鉄棒を四

本の気化の柱の間に入れ、四〇度くらいずつ捻じる動作を繰り返すのである。新品のSVEAの箱には入っていたが、使ったことはない。

もう一つ可能性として考えられるのに、SVEAの燃焼部分は台形の金属環（わっぱ）であるのに対し、PRINUSやPHOEBUSは、燃焼の上皿のうえに周囲に小さい穴がたくさんあいた帽子のようなものが乗っていて、炎はその小さい穴から噴き出す。このほうが、炎が飛んでしまうのを防ぐのではないだろうか。ハント隊もエヴァンス隊も、高所でケロシンバーナーを使用しているのは、この調節バルブと帽子型燃焼部分をもつバーナーではないだろうか。

さらに非科学的な、しかし現実的な経験を、K12のベースキャンプでした。ケロシンバーナーが全く燃焼しなくなったのである。その原因は、ケロシンに大量の水が混入していたからである。水入りのケロシンをスカルドカパルで購入したのか、ベースキャンプで誰かがケロシンをぬすみ、代わりに水を混入したのか、わからない。あるカラチの商社駐在員は、自宅でウイスキーが紅茶で薄められることがよくあるとぼやいていた。同じ現象であろうか。ケロシンのばあい、外側に透明のパイプを取り付けられるようにしたポリポトルを準備しておく必要を感じた。

考察二 ブタン・プロパン用バーナーについて
これについては、ほぼ前節で述べたとおりである。ブタン・プロパン用バーナーに

は、ノズルの直径調節用バルブがついているから、酸素分圧、気圧の問題はなく、低温と気化の潜熱をうばわれることによって、液化ガスが気化しにくくなる問題のようである。ヤルンカンで井上治郎は、一つのバーナーでもうひとつを温めるとよいとしているが、それは危険だと、甲斐はいっている。横山によれば、一九八〇年のチョモランマ隊で、七六〇〇mでこれをやって、爆発し、テントは燃え、自身もやけどした隊員がいるという。貴重な、語り継がれるべき実験というべきである。

現在、ブタンバーナーと天ぶらガードが主流のようだが、これも非科学的な問題がある。K12のときに経験した空輸不能の問題である。山本によれば、日本通運(株)に梱包を依頼し、その証明書を見せれば、空輸可能という。しかし、中国では、北京からベースキャンプまで陸路輸送したと記憶している。

バーナーではないが、マッチの問題がある。現在はどうしているのだろうか。ヤルンカンで

桑原チヨゴリサ登山隊長のこと

芳賀孝郎

私は一生のうちに一度はヒマラヤへ行つてみたいと夢を描いていた。運よく加藤泰安氏の推薦で桑原武夫隊長の率いる一九五八年チヨゴリサ登山隊に参加することが出来た。この年カラコルム・バルトロ氷河へ入った

は南極用のマッチを使って、恐るべき硫黄のガスがテント中に充満したという。K12では、ヤルンカン隊の推薦で、あるスナック・バーのマッチを大量にもらった。私の推薦はダンヒルなどの高級ガスライターを胸のポケットにしまっておくことである。高級でも圧電式はよくない。フリント式がよい。また、風に強いとされる白金カイトのようなのは、よくない。調節ネジがついていても、二千メートルでだめになった。

高所でのバーナー使用についてのべたが、調子よく燃焼するとは、酸素を消費することである。換気に注意しなければならぬ。雪洞で登山を行う場合、とくに危険である。朝、目がさめたら、胸のポケットからライターをだし、煙草に火をつけることをすすめる。もし、着火しなければ、酸欠状態である。

付表のデータについて、平井一正、酒井敏明の支援をえた。

文中、すべて敬称を略しました。お許しください。

登山隊は日本隊のほかはクリンチ隊長の率いるアメリカヒドンピーク隊とカシン隊長の率いるイタリヤガッシュヤブルムIV隊であった。

チヨゴリサは八月四日藤平・平井の両隊員によって一八時間のアルバイトの結果登頂された。アブリッジ公・ヘルマンブルを撃退した花嫁の峰も我々によって遂に登られた。チヨゴリサ第四キャンプ六七〇〇mの少し下

がったところにヘルマンブルのテントが一年間の風雪に耐えて淋しく残されているのを発見した。その時あの超人的なヘルマンブルがまだ生き残っているような気がした。ブルの遭難は登山家としての運命的な遭遇と思うような気持ちになった。第四キャンプにて夜一人でカラコルムのきれいな星空を眺めているとブルの亡霊が出そうな薄気味悪い思いをしたことを思い出す。

チョゴリサ登山を終えて休養をしていた八月一二日、イタリア隊のフスコ・マライーニ副隊長、ガッシュャーブルムIVの登頂者ボナッティ他二名の隊員が私たちのベースキャンプを訪ねてきた。

マライーニは、戦前、日伊交換留学生として北大・京大に学んだ民族学者であり、登山家・旅行家・写真家・著述家でもあった。私たちのキャンプを訪ねたマライーニは、流暢な日本語で「日本のお菓子と美味しい日本茶を所望する」ときたから私たちは驚いた。キャンプでは貴重な羊羹は、通常5mm以上の厚さに切つてはならぬ、という隊長の配慮でもこの時ばかりは二倍の厚さに変更されて、私たちもお相伴に預かることが出来たことが懐かしい。

マライーニは三年前九二歳で亡くなった。その葬儀がフィレンツェの旧市庁舎で行われた様子をイタリア在住の谷 泰氏から私たちに伝えられた。「片手にトランペットを持った市の儀仗兵が三人、フィレンツェ市長と共にやってきて告別式が始まった。多くの参列

者の最後にチベットの僧侶が三人読経、市の祭服を着た楽師の哀悼のためのトランペット吹奏で式は終わった。カトリックの国イタリアで、彼の意に沿った国際的な簡素な葬儀であった」と。私はあのチョゴリサのベースキャンプを訪れた若き日のマライーニを偲んだ。

もう一人の訪問者のボナッティは、アルプスの数々の北壁やドリユの西壁登攀等の大記録を持つヨーロッパを代表する登山家である。クールマイヨールで夏は登山ガイド、冬はスキーコーチをしていた。澄んだ青い瞳でも惚れるハンサムな青年で、その静かな物腰の中の何処にあの様な登攀記録を達成する精神力が隠されているのかと若かった私は不思議に思った。

ヘルマンブルはボナッティの友人であった。私たちは発見したブルのテントの中から山日記、コップエルなどの遺品を持ち帰っていたので、それらをボナッティに渡す事ができた。彼はそれらの遺品を、ブルの未亡人に持ち帰ることができることを喜んだ。もしアルプスに来ることがあつたら是非クールマイヨールの私を訪ねてきてほしいと言つた。しかしイタリアのアルプスを訪ねることは実現していないが、十年程前ボナッティが元映画スターで愛妻のロッサノ・ボデスタと共に来日した時に再会を果たし、喜び合つた。彼がのちに優れたドキメンタリーの作家になつたのは、マライーニの影響を受けたようであつた。

私たちのベースキャンプ訪問の終わりにイタリア隊の四人は、お茶のお返しにと、イタリア民謡「大尉の遺言」「フニクリフニクラ」を見事な三部合唱で歌ってくれた。一方、私たちは寮歌やデカンシヨ節がせいぜいというところで、お粗末なものであつた。

お互いの登頂成功を祝つて別れを告げ、帰路につくイタリア登山隊員の後姿が、これまた決まっていた。グレーのチロルハットにグレーのフラノのニッカボッカ、エンジのセーターにエンジのストッキングといういでたちで、ステイールストックを使つて軽やかに氷河を下つていった。

イタリア隊が帰つた後、桑原隊長からは次回遠征するときは、三部合唱で歌える唄を用意しておくようにと、更に服装に關しても国際交流に恥じないスタイルを心掛けるようにとの言葉があつた。

一九七九年、登山隊長の桑原武夫先生が文化功労賞を受賞された。その時、私とチョゴリサの隊員仲間の岩坪五郎氏が、ある新聞に桑原先生について寄稿している。

彼はその中で、チョゴリサ登山隊の話を持ち出して、我々若い隊員が桑原先生から受けた教育について書いています。キャラバンの間、毎晩のように桑原先生の文化講演を無料で聴けた、と。そしてそれは、自分が学校で学んだことの数倍の値打ちがあるものだったと述べている。私も全く同感であつた。

若い隊員は、先生のお話に聴き入り、その深い学識や経験からほとばしりである哲学や人

生観、文化論から世渡りの方法まで、実に多くのものを学んだ。

隊員各々の役割分担があり、渉外係、食糧係、装備係等々誰でもどうしても英語で折衝しなければならぬ時があつた。桑原隊長は、英語の上手、下手に関係なく隊員が英語を使う時誰の助けも借りず、相手がわかるまで頑張つて話すようにと厳しく言われた。

これはなかなか難しかった。私は装備担当で外国隊の訪問の折、装備の説明を命じられた。その時は自分の下手な英語が恥ずかしくて声になつて出てこなかつた。

隊長はお見通しで「英語の下手なのは、日本人だから当り前や。お前が恥ずかしいと思つてゐるのは、英語が通じないと言ふことよりも、隣で聞いている俺や、仲間にこんな文法的間違いをしたら笑われるだろう、というところが先に立つて、思うように言葉が出てこないのだ。回りの日本人を気にするな。外国人

飛び入りのチヨゴリザ

今川好則

一、私は、一九五五年、金沢大学卒、同年、外務省に入るまで登山歴皆無、スキー靴を履いたこともなかつた。翌五六年、ウルドゥ語三年研修のため在パキスタン大使館員としてカラチに派遣され、前の二年はカラチ、後の一年はラホールに住んだ。その間、留学とは

は日本人の英語が下手なのは当り前と思つてゐるのだ。ええ恰好しようと思つてゐては、これから国際人になれん。」といった次第。

私は先生のお陰により人前で英語をしゃべる心臓だけは充分強くなつてしまつた。しかし肝心の英語の方は、現在もいささかも進歩していない。遅すぎるが大いに反省している。桑原隊長から受けた数々の教えにお礼を申し上げたい。

五〇年前の楽しい遠征を思い出す今日この頃である。現在アメリカのグローバル政策の影響によりイラン・イラク・パキスタン・アフガニスタン等イスラム世界は不安な社会に陥つてゐる。カラコルム・ヒンズークシ地域へちよつと行こうかという時代ではなくなつたことが悲しい。

半世紀が過ぎてもカラコルムの一部・カシミールの地域は現在も紛争が続いてゐる。早く平和が回復することを願うものである。

いい条、パキスタン（今のバングラデシュを含む）の平野部のほぼ全域とインドの主要都市部を駆け巡つた。

五七年、京都大学・パンジャブ大学学生合同スワート・ヒマラヤ探検隊（日本側隊長・松下進教授）に大使館日書記官の子息（小学生）が部分参加することとなり、これのお守り役（？）として私も同隊に加わり、スワートのカラーム地区まで同行した。その時の隊員（本多勝一、岩坪五郎、荻野和彦、沖津

文雄の四氏）、特に岩坪氏より私のことが伝わつたせいも、翌五八年春、AACK側より私にチヨゴリザ遠征隊に加わらないかとオファーがあつた。そこで、研修指導官のI参事官にこのことを話すと、二カ月も山に行くのは勉強の妨げにならうと難色を示された。私自身も、上述の通り。登山のど素人であり、隊への参加は却つて隊に迷惑を掛けることにならないかと案じた。しかし、折から大使会議出席のため帰国中の成田大使に桑原先生が直接働きかけられたせいで、同大使より会話の勉強にもなるからと隊への参加方命じられた。

二、参加が決まつたからには、隊のためにできるだけのことをしたいと思ひ、ラウルピンデイでの連絡将校ワジ陸軍大尉との打ち合わせ及びスカルド以遠の現地事情の調査、カラチでの隊員受け入れ、隊の荷物のはしけによる沖待ち貨物船からの積み下ろし、通関、鉄道便発送、スカルドまでの空輸等、スカルドでの高所ポーター及びクーリー約一六〇名の雇い上げ、ベース・キャンプまでの指揮・統率等に當つた。

三、ベース・キャンプが設営されれば、私の任務は半ば終わったものと考え、隊の足手纏いにならないよう桑原隊長とワジ大尉と共にベース・キャンプに留まる心算であつたが、若気の至りか、誘われるままにC3まで上がり、更にはコンダス・ピーク（六七五八メートル）登頂まで果たすことのできたのは望外の幸せであつた。

その間、私は隊に貢献するどころか、むしろ隊のお邪魔になったのではないかと、忸怩たる思いであるが、本登頂記念会報発行の機会に、若干の思い出と後日譚を記すこととしたい。

(一) 隊と酒

小生は自他共に認める大の飲兵衛。隊への参加が決まると、直ちに在カラチわが大使館と友人の在ラホール日米国副領事よりウイスキーの入手に努め、スコッチとバーボン数ダースを確保した。スカルド到着からベース・キャンプ設営の数日後まで、連日夕食時にウイスキー一―二本を提供した。隊が日本から持ち込んだのは、登頂祝賀用のサントリーのダルマ数本であった。

(二) スカルドのP・A

スカルドでは同地区のポリティカル・エイジェント(地区行政官)ハビーブル・ラーマン・カーン陸軍准将(スバス・チャンドラ・ポースの副官として台北でポース遭難機に同乗し、顔面等に火傷を負った。)に隊員の宿営、食糧の確保、ポーター及びクーリーの雇用等で大変お世話になった。それから約二年後、小生、東京都からギルギットに贈られる桜苗木一〇〇本を携行して同地を訪れたところ、なんとこのラーマン・カーン氏がこのP・Aとなっており、私は同氏の官舎の客としてもてなされた。苗木贈呈式の後、早々に辞去しようとしたが、悪天候のため数日間、飛行機が飛ばず、足止めを喰った。その間、自前

の酒を飲み尽くし、地元のフンザ・パーニー(ぶどう酒)を飲み耽った。やつとマリー(高度二五〇〇メートル)の自宅(大使館連絡事務所内)に帰着すると、私への帰国命令の電報が待っていた。

一九九〇年九月、総領事としてカラチに赴任すると、ラーマン・カーン氏はカラチ電力公社総裁となっていた。同じディフェンス・コロニー住まいで、私は同氏夫妻とよく会ったほか、年末にはウイスキーと外務省作成の生花カレンダーを届けに同氏宅を訪れた。

一般に飲酒は回教徒にはご法度とされているが、そもそもコーランもマホメットも飲酒を厳禁はしていない。メディナ啓示の「牝牛」には、「酒と賭矢は大変な罪悪ではあるが、また人間に利益になる点もある。だが罪の方が得になるところより大きい。」とあり、同啓示の「食卓」には、「酒と賭矢と偶像神と占矢とはいずれも厭うべきこと、サタンの業じゃ。心して避けよ。そうすればお前たちきつと運がよくなるぞ。サタンの狙いは酒や賭矢などでお前たちの間に敵意と憎悪を煽り立て、お前たちにアッラーを忘れさせ、礼拝をなまけるように仕向けるところにあるのじゃ。」(井筒俊彦訳コーランによる)(訳者注：賭矢―七人でする賭事。尖を籤として引き、「幸矢」を取った人が賭のらくだを獲得する。占矢―吉凶二種の矢で、旅行その他重要な仕事に手をつける前にその可否を占う。)また、伝承によると、ある日、マホメットは日中に友人の家を訪れ、そこでの結婚披露宴で、参会者達が非常に楽しそうに談笑した

り、抱き合うのを見たが、それが皆酒を飲んだること知り、飲酒を人に愛を齎すものとして祝福した。しかし、翌日、同じ家を再訪したところ、家中に血が流れ、人の手足がばらばらに散乱しており、これが飲酒に伴う喧嘩騒ぎによるものと知って、考えを変え、飲酒を呪い、信者達に対しこれを禁じたと言われる。

そこで、同じ回教徒でも硬軟両派があり、ワジ大尉は硬派であり、ラーマン・カーン准将は軟派なのであろう。また、本音と建前を使い分けて飲む回教徒も多い。カラチ離任直前、私はラーマン夫人より大川周明訳のコーラン(古蘭)を贈られた。世の中狭いものである。

(三) クーリーとの触れ合い

隊のキャラバン、特に往路のキャラバン中の私の一番の任務はクーリーの監督・統制であった。外国登山隊ずれしているクーリー達は何度も身勝手な要求を出し、ストライキの構えを示すこともあったが、私はお互い人間だと極力対等の姿勢で連中に接したところ、なんとか折り合いが付き、大事に至らなかつたのは幸いであった。彼らは基本的には純朴で、優しい人間である。言葉が通じないと困るが、クーリーのうちリーダー格の数人は中等程度の教育を受け、ウルドゥ語をよくするので助かった。

(四) 高所ポーターの乾パン投棄

隊が本邦から調達・輸送した乾パンは栄養

餌の高い美味なものであったが、これは精々ベース・キャンプまでのこと。それより高地では、どうもこれに対し食欲が起きなかった。ある日の夕刻、C2で待機していたところ、一人のポーターが乾パンを手付かずの箱ごとテント脇から崖下に投げ捨てるのを目撃した。これは担がされる荷を減らそうとするよりも、食べさせられるのが嫌でやったのではないかと怒る気にもなれなかった。

(五) ヒッドン・クレバス落下の恐怖

ある日、潮田カメラマンと二人で、私が先行してC2からC3へ向かって雪原を歩いていたら、突然足元の雪が崩れ落ち、私の両足はすくと下に落ちた。とつさに両手をついた部分の雪はわりと硬く、私はなんとか身体を支え、雪上に這い上がる事ができた。足を踏み落としてあけた穴を覗くと、下は広く深い空洞で、青白く光っていた。後方の潮田さんとはザイルで結ばれていたが、もしも私がクレバスに全身落ち込んだら、軽量の潮田さんは引きずられて、共に奈落の底(?)に落ちたことであろう。後刻、このことを加



クレバスに落ちかけて作った穴

藤副隊長に報告すると、その場で「今後二人だけで行動することを厳禁する。」と言いつ渡された。

小生、延べ二〇余年の在外生活中、酒飲み運転、スピード出し過ぎ等による自動車事故、カラチにおけるインド軍の空爆、カブールでの公邸ロケット弾被災等、いろいろと危ない目に遭ったが、思い返して、これまでに一番危なかったのはこのクレバス落下未遂(?)であったと思われる。

八月四日、藤平、平井両隊員によりチョゴリザ登頂成功。七月二日から無線通信機は使用不能となり、登頂成功の吉報も加藤副隊長より桑原隊長に無線で伝えられず。翌五日、私はポーター一人に先導されてC3からベースキャンプに下りて、登頂を隊長ほかに伝えた。桑原先生著の「チョゴリザ登頂」一六三頁には、私が一人で下山して来たところがあるが、これは誤り。上記のハプニングをしでかした小生には、とても単独行は許されなかった。

(六) コンダス・ピーク登頂

八月三日早朝、加藤副隊長、潮田さん及び私の三人は、軽装でC3の東側にちよこんと丸く出っ張ったコンダス・ピークに向かった。ほんの近くに見えるので、数時間で行ける位に安易に考え(加藤さんがどのように見込んだかは不明)、昼食の用意もせずに出発したが、途中雪はかなり深く、ラッセルに悩まされ、緩やかながら高度が上がるにつれ、息切れしやすくなり、数十メートル進んでは、雪上にはたと倒れて、小休止し、また漸進す

るといふ具合で、山への距離はなかなか詰まらなかつた。私は往路数回腹痛を覚え、しゃがみこんで、力んでもみたが、不発。一種の高山病にかかったようである。山頂部は円形の筒状で、これをぐるぐる回る形で登った。岩場こそなかつたが、斜面はかなり急で、山には素人の小生、身体が横に傾いて下に落ちそうな気になり、身体を山の斜面に持たれかけながら歩こうとすると、身体を起こして斜面に垂直にするよう加藤副隊長から指導されたが、なかなかうまくいかなかつた。潮田さんも山登りは初めてであつたが、何とか夕方近くに登頂できた。潮田さんも私もスチルカメラしか携行しなかつたが、山頂でチベット側に展望された黒々とした多数の山々を撮影することができた。テントに帰着したのは夜の八時過ぎで、帰りの遅いのを心配して待っていたポーター達がテントから飛び出して迎えてくれた。昼食抜きであつたが、不思議に空腹感はなかつた。

改めて、ヒマラヤのスケールの大きさを思い知らされた一日であつた。

今川さんの文章を読んで・追記

高村奉樹

まず今川さんが一九六一年の春、桜苗木を寄贈のためギルギットへ行かれたこと、そして当時同地区のPA・ラーマン・カーン氏に会われたことを今回初めて知りました。アプ



ラーマン・カーン氏（右）と四手井教授
ギルギットのPA公邸にて（1961年8月）

リコットが咲き、実る地で、その後桜も良く育っていることを祈ります。実は同じ年、サルトロ・カンリ予備交渉のため短期訪パされた四手井綱彦先生は八月末に私とともにギルギットへ飛ばれて迎賓館で同氏に会われました。カラコラム・クラブとの合同登山計画について、国防省の許可の見通しがようやく見えた時期です。カラコラム地域の行政区の長

チヨゴリザのおたふく狸と 高所医学

斎藤惇生

一九五八年八月一〇日ごろだったと思うが、朝日新聞が藤平正夫と平井一正の二人が、チヨゴリザ登頂に成功と報道した。私は一九五六年一月から高山の赤十字病院で、かけだしの外科医員として勤務していた。朝

への表敬も目的でしたが、今川さんも記された台北の事故の際、チャンドラ・ボースと四手井先生の長兄、綱正中将が運命をともにされた縁もあります。先生はボースの元副官と互いに固く手を握られたことを記憶します（写真）。

ギルギットは緑が多く快適で、しばしの休養とラカポシ近くの山、ドバニ（現地のことばで確か霧の母、約六〇〇m）の中腹までテントを上げ、近くの氷河を眺めつつ先生と一泊しました。

なおチヨゴリザでは、今川さんの現地派遣はじめカラチ日本大使館に多大の協力いただきましたが、成田大使のご高配によるどころ大きいのは桑原先生の記述の通りです。私たち若者にも丁寧に対応くださった同大使は、現メキシコ大使の成田右文氏（AACK）の父上であることは知る人ぞ知るでしょう。編集長のお勧めで小文を付記しました。

起きて新聞を見て、私は思わずはいていた越中ふんどしを新らしいのはきかえた。そのころはパンツよりふんどしが主流だった。なぜそのようなことをしたか分らない。多分次の遠征には俺もと感じたのだろう。もう今は死語だが、気をひきしめて事を起す時、ふんどしをしめてかかると言っていた。

一九五〇年のフランス隊のアンナ・プルナI峰初登頂以後、ヒマラヤの八〇〇〇米峰は、各国の威信をかけた登山隊に次々と登頂

されていた。AACKは五年のアンナ・プルナIV峰試登後、いくつかの計画も実現しかなかった。チヨゴリザの成功はヒマラヤの扉をおおきく開く原動になった。

当時は高所登山全般、特に高所順応や高所に対する知識は乏しかった。医師の重責をもつて参加した中島道郎の心労、苦労はたいへんだったと思う。中島はこの経験を継続探求し、日本登山医学研究会を創設し、医学会にまで発展させた。

チヨゴリザでは、それまで報告されてなかった症状が出現した。それは全身浮腫だった。桑原隊長が自著の「チヨゴリザ登頂」にサポートの荷上げで疲れきってBCに下りてきた二人の若手隊員の顔が、おたふくかぜにかかった狸ようになっていた、と書いておられる。現在は高所での浮腫はよく知られているが、それまでの報告書にはない。日本山岳会隊のマナスルの医療報告にも記載がない。中島も私もこの浮腫の原因追求が高所医学研究の原点になったのである。

私が初めて遠征に参加したサルトロ・カンリでは、登山隊として初めて心電計をBCに運び心電図を撮った。発電機は平井が造り四〇kgあった。BCで動かそうとしたがスカスカとすぐ止る。考えて酸素を吸入口に流したら無事動き、ヒマラヤの現地で世界最初的心電図を撮れた。高所によく見られる右心室負荷のパターンはこの時記録されていた。しかし浮腫と心臓との関係は明らかでなかった。

ひどい浮腫を経験したのはヤルン・カンの時だった。松沢が五日間連続のルート工作後

全身浮腫をきたした。利尿剤のラシックスの四〇mgを一日二回服用させたら、尿がなんと八六五〇mlでて浮腫は消失した。ヤルン・カンの心電計は乾電池駆動で四kgと軽くなっていた。松沢の心電図でも浮腫と心臓との関係は証明できなかった。

高所浮腫については中島が詳しく説明している。高所で尿が減って顔や下腿にむくみが出たらラシックス二〇mg一錠服用するとよ

チヨゴリザ登頂五〇年

近藤良夫

きたる八月四日はAACKのチヨゴリザ初登頂五〇周年に当たる。そういえば、まさにその通りで、日ごろはどちらかというところから遠い所にいる私にとってもそうなのだから、もつと山に、探検に近いところにいる皆さんにとつては、この五〇年がもつと身近であり、もつと大きい影響を与えた（与えつつある）に違いない。そのように考えると、チヨゴリザ初登頂の一九五八年から現在（二〇〇八年）の五〇年間だけでなく二〇〇八年からさらに先の五〇年（二〇〇八年～二〇五八年）についても思いを練ることがAACKにとつて同様に重要ではないかと愚考する。

AACKのチヨゴリザ登頂以前のアンナブルナIV峰試登の頃は、私はAACKの遠征とそれらの準備には、それほど熱心ではなかつ

た。夜服用すると頻尿で眠れないから朝か昼に服む。私の経験だがシシヤパンマで浮腫が出て疲労感があった。ラシックス二〇mg一錠二日服み、浮腫がとれて登高意欲が出てきた。ふりかえってみると中島も私も高所医学への関心を強く感じたのは、チヨゴリザでのおたふく狸の顔そつくりの浮腫だった。日本の高所医学研究の出発になったと言つても過言でないと思う。

た。その当時は京大本部構内の図書館は内装工事中で、その奥めいた一室を借りて遠征準備が行われていた。その中心人物の一人は鈴木さんであった。ある時は鈴木さんから呼ばれ、その仕事を援助するように命ぜられた。これが私とAACKの接触の最初である。一九五八年には桑原武夫先生がチヨゴリザ遠征隊々長に選定され、遠征の準備が進んだ。（22頁文献③）

京都大学は俗に探検大学とも言われる。その探検の内容はかなり広くて、処女峰の登頂、未開発地域の探検などにこだわらず、野外分野の科学や技術の研究や開発なども含んでいる。京都大学のノーベル賞受賞者数が他大のそれらに比して圧倒的に多いのは、このような京都大学の学風にきざしている。また、人文学研究所教授の桑原教授がAACKの学術登山隊の隊長であったり、工学部の石油化学教室教授であった福井謙三教授がノーベル化学賞の受賞者であったりするのは、このような学問分野にこだわらない京都大学の学風

に基因するものようである。またいま工学部は吉田キャンパスから新しい桂キャンパスへ移転中であり、このこともこれからおこるであろう多くのことを判断するに当つて考慮すべきことと考えられる。

一九七三年の春、AACKはヒマラヤ八〇〇〇m級の巨峰ヤルン・カンを目指して全力をあげ、西堀栄三郎さんを隊長とする登山隊を送った。ネパール政府からの解禁許可から先発隊出発までわずか三か月を残すのみで、募金などを含む準備には多くの困難が予想された。西堀さんは私を呼んで、「こんどの遠征隊の準備には並々ならぬ困難が予想される。常識から言つてこれらを乗切することは不可能である。そこでこれから私はその達成のために非常識なことを行なうこととする。私は猿回しの猿になるから、お前は猿回しになつて私を使うように」と指示された。この猿はなかなか指示を受入れぬ猿ではあったが、その作戦は成功し、一月下旬には先発隊、二月上旬には本隊を出発させることができた。

AACKは一九八〇年に創立五〇周年を祝い、それにふさわしい遠征を計画として選んだ。チベット高原の南端にそびえるナムナニ、シシヤパンマ、チヨモランマ、カンペンチンなどの山々がこれらであり、AACKは一九八二年にカンペンチンの、また一九八五年にはナムナニの登頂に成功している。私はこれらの遠征のうち隊長としてカンペンチンの遠征に参加したが、同時に若い隊員の学生たちが彼ら自身の経験をを通じて種々の体験と

反省を積み上げることが、彼ら自身の将来にとっても重要であると考え、例えば私が募金などで大阪の会社を訪問する時などには必ず学生や院生を同行させ、遠征の目的、重点などをできるだけ彼らに説明させることとした。これらによって同行した学生、院生諸君、会社の面接の皆さんの遠征に対する理解をおおいに深めることができた。このことにより私自身の遠征に関する理解が深まったことは言うまでもない。

事務局報告

【理事会決議録】

日時 平成二〇年五月一日(日)

午後一時～午後二時五〇分

場所 京都市左京区吉田河原町 京大会館

一〇二号室

出席理事 上田豊、前田栄三、松林公蔵、福

寫義宏、前田司、永田龍、吹田啓一郎、竹田

晋也 以上八名

委任状によるもの 横山宏太郎、松沢哲郎、

牛田一成、中川潔、人見五郎、田中昌二郎、

高尾文雄、山田和人、小林尚礼 以上九名

欠席理事 なし

出席監事 西山孝、伊藤宏範 以上二名

議事の経過および結果

会長上田豊が議長となり、「本日の出席者は定款第二一条第一項に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり議

チョゴリザ関係文献

高村・平井

- (1) AACK ニューズレター
No.10. 『チョゴリザ初登頂四十周年 記念講演会・記念パーティ』 Sep.1998.
No.11. チョゴリザ初登頂四〇周年記念特集号
Dec.1998.
No.12. 潮田カメラマンとチョゴリザ 平井一正.
Mar.1999.
No.20 別冊. 桑原さんの追憶 藤平正夫. May.2001.
No.28・29. チョゴリザその後—その後どれだけ登られているか— 平井一正. Sept.2003.
No.30. 追悼「さよなら」藤平 舟橋明賢. 藤平さんを悼む 平井一正. Jun.2004.
- (2) 京都大学学士山岳会編 「チョゴリザ」 朝日新聞社 1959.
- (3) 桑原武夫 チョゴリザ登頂 文芸春秋社 1959.
- (4) 加藤泰安 チョゴリザ登頂 山岳 第54年 1959. pp.1-48.
- (5) 加藤泰安: 森林・草原・氷河 茗溪堂 1966.
- (6) 藤平正夫 今は風に語らしめよ 桂書房 1988.
- (7) 平井一正 初登頂 ナカニシヤ出版 1986.
- (8) 徳岡孝夫 ヒマラヤ—日本人の記録 毎日新聞社 1964.
- (9) 加藤、藤平、深田ら チョゴリザ登頂座談会 山と溪谷 233. 1958.
- (10) K. Diemberger: Broad Peak and Chogolisa 1967. Himalayan Journal Vol.21. 1958, pp1-15
- (11) T. Kuwabara: The Ascent of chogolisa ibid. Vol.21. 1958. pp.78-85.

事に入った。

第一号議案 平成一九年度事業報告について

理事吹田啓一郎により平成一九年度事業報告が説明され、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第二号議案 平成一九年度収支決算について

理事竹田晋也により平成一九年度収支決算が説明され、逐一審議の結果、満場一致で承認した。

第三号議案 理事の選任について

事務局より幸島司郎会員を理事に選任する件について提案があり、逐一審議の結果、満場一致で承認し、同日、開催される総会での議案に諮ることとした。

第四号議案 新入会員について

事務局より下記一名の本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認した。

合田 真

第五号議案 映像資料の使用について

理事竹田晋也より、本会が所有する映像資

料の使用に関する下記二件の申込みがあることが報告され、逐一審議の結果、満場一致でこれらの使用を承認した。

・ポナペ島の調査基地映像（ビデオ「ヒマラヤへの道」に所蔵）・京都大学フィールドワーク映像アーカイブセンター設立準備委員会による「京都大学のアフリカ研究五〇年」への使用

・ビデオ「ヒマラヤへの道」・京都大学デジタル・アーカイブ・センターでの常設展示上映

議長より「本日の社団法人京都大学学士山岳会理事会の議事は以上をもって終了したので、議事の経過は議事録にまとめ、その末尾に議長ならびに理事二名が署名捺印すること」として閉会を宣言した。

平成二〇年五月一日
社団法人 京都大学学士山岳会理事会

【総会決議録】

日時 平成二〇年五月一日（日）

午後三時～午後四時三〇分

場所 京都市左京区吉田河原町 京大会館

一〇二号室

正会員の総数 二五四名

出席者数 一五五名

（うち委任状出席 一二〇名）

議事の経過および結果

上記のとおり定款所定数の出席があり本会は適法に成立したので理事（会長）上田豊が

定款の規定により議長となり、下記議案の審議に入った。

第一号議案 平成一九年度事業報告および収支決算について

担当の者より平成一九年度事業報告および収支決算について報告があり、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認可決した。

第二号議案 平成二〇年度事業計画および収支予算について

議長は原案について担当者に説明を行わせ、これを議場に諮ったところ、満場一致で原案どおり承認可決した。

第三号議案 理事の選任について

同日、先に開催された理事会において承認を得た、幸島司郎会員の理事選任について、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認可決した。

第四号議案 新入会員について

理事会において承認を得た下記二名の本会入会申請者について前田栄三副会長より紹介があり、満場一致で承認した。

平野 桂介、合田 真

以上をもって議案全部の審議を終了したので午後四時三〇分議長は閉会を宣し解散した。上記の決議を明確にするため議長および議事録署名人において次のとおり署名押印する。

パイオニアワークとしての登山・探検・フィールドサイエンス —チョゴリザ登頂50周年記念シンポジウム—

主催 京都大学学士山岳会 (AACK)
協賛 京都大学霊長類研究所、同東南アジア研究所
同野生動物研究センター

1. 日時、場所

2008年11月3日(月、祭日) 京都大学芝蘭会館稲盛ホール

2. 記念シンポジウム 司会 竹田晋也 午後1:30～5:30

- 1) 開会挨拶 上田豊 (AACK 会長、名古屋大名誉教授)
- 2) 来賓挨拶
- 3) 気候変化とヒマラヤの氷河 藤田耕史 (名古屋大准教授)
- 4) 高所医学からフィールド医学へ 松林公蔵 (京都大教授)
- 5) 南極初越冬とその後の50年 横山宏太郎 (農業・食品産業技術総合研究機構)

休憩 (15分)

- 6) アフリカの森とチンパンジー研究の未来 松沢哲郎 (京都大教授)
- 7) 雪氷生物学から野生動物研究へ 幸島司郎 (京都大教授)

休憩 (20分) チョゴリザ映画の一部10分上映

- 8) チョゴリザ登頂から50年—未知への情熱を育てた京大山岳部の土壌
平井一正 (神戸大名誉教授)
- 9) 閉会挨拶 松林公蔵 (AACK 副会長、京都大学山岳部長)

3. 記念祝賀会 午後6:00～8:00 同会館内ホール 会費 6000円

芝蘭会館:京都市左京区吉田近衛町京大医学部構内(075-753-9336)、市バス京大正門前(東一条)から西へ徒歩2分(京大会館から東へ徒歩約5分南側)

このシンポジウムは一般公開ですので、ご希望のご友人やお知り合いの方がおられましたら、どうかお誘いください。

訂正

45号37ページ3行目

(誤) 「文化技術」
(正) 「技術文化」

編集後記

チョゴリザ初登頂から五十年。一番若かった隊員でもいま七十三歳。隊員や当時の会員の生の声を一同に聞けるのも最後の機会かと考え筆を執っていただいた。半世紀の星霜の様変わりに驚かされる。

次号原稿の締め切りは九月下旬。

(前田 司)

編集委員

前田 司

発行日 二〇〇八年八月末日

発行所 京都大学学士山岳会

〒六五八-八五四〇

京都市西京区京都大学桂

京都大学工学研究科建築学専攻

吹田啓一郎 気付

京都市北区小山西花池町一八

製作 (株) 土倉事務所